

## 心臓移植におけるチーム医療の大切さ

布田 伸一（東京女子医科大学東医療センター 内科 准教授）

1967年12月、南アフリカ共和国においてヒトで第1例目の心移植が行なわれてから2008年6月までに世界中で84,740例の心移植が行なわれている。その1年生存率は約80%で、欧米においては今や心移植は通常の医療として定着している。

一方わが国では、1968年のいわゆる「和田移植」後、31年の年月を経て、1999年2月28日によく再開されたが、毎年5～10例しか行われていない。2010年7月から施行される改正臓器移植法に今後の飛躍が期待される。

ところで移植医療は、総合医療である。従って縦割り医療システムのなかでは育たない。なぜなら、移植に関する医療の部分だけを取り上げても、移植前の重篤かつ複雑な移植対象患者のケアから移植後の複数科に跨がる管理を遂行しなければならない。ひとつの目的を貫徹するために、様々な分野の科、医師、コメディカルが参加し、その個々に様々なスキルが要求される。

まず、移植適応の患者に出会い、共に苦悩し、ときに励まし合い、その後に移植への光を求めるところから移植医療は始まる。この過程において、医療者は自然に多くのことを学び取り、これらの経験やそこから得られた知識は移植以外の医療にも深く影響してくる。また患者自身も共に経験を積むことで大きく成長することが多い。

このように医療者と患者は、「移植」を共通語にそれぞれが融合的に成長し、その結果は、移植後の管理にも自ずと影響してくる。

20世紀に急速な発展をした自然科学は、医療の分野においても大きな変化をもたらし、今世紀においては、「移植」ばかりでなく、遺伝子治療、再生医療等の先端医療の発展につながっていくであろう。このような生命工学の進歩に伴い、「ヒト」としての認知と尊厳はより重要な課題になってくるものと思われる。一昔前に比して複雑化してきた現在であるからこそ、「ひとりひとりの患者」への医療は、その時代に応じた知識と深いヒューマニズムをもって行なわれなければならないと思われる。